



# 近江刀工の遺跡

都市の開発が進み、人情風俗の推移と共に昔から伝わった刀工の遺跡等も、しだいにそのいわれを失い、その影をひそめてゆくことは誠に心淋しいことでもあります。そこで私はまだその姿かたちを留めている今のうちに、それらを一通り紹介し、後学の為の資料としておきたいと思えます。

## 下坂鍛冶遺跡

北陸線の長浜駅を出るとすぐ右手湖岸に大きな大佛さんが見えます。この沖合の水中湖底から井戸跡が発見されました（昭和27年頃の大旱魃の時）。これが私たちが探し求めていた下坂鍛冶の作業場跡でありまして、古い記録では、延宝頃にも出現したことが書かれています。

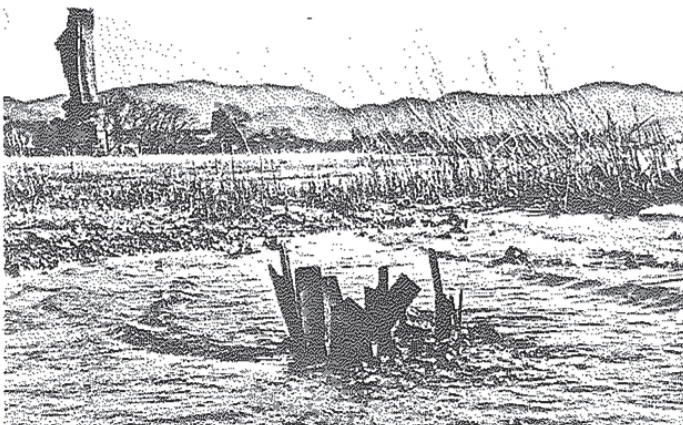
下坂鍛冶といっても御存じの方は案外少ないかも知れませんが、この一派の刀工史上に占める地位ははなはだ重要でその影響は全国に及んでおります。越前下坂、会津下坂、筑後下坂、筑前下坂、山城下坂、伊豫下坂、越後下坂、遠州下坂、勢州下坂、筑前下坂、常州下坂、丹波下坂、阿州下坂、土州下坂、信州下坂等の刀工は皆この下坂一統の鍛冶であ

りました。中でも越前へ移住した越前下坂は最も有名で、この中からは江戸幕府の御用鍛冶となって熱田神宮の宝物短刀を始め数かずの名作を残した御紋康継が出ております。この人は下坂中にある下坂家の出で市左衛門と称し、幕末までその子孫が続いております。この家は、写真に示すように室町時代の古い御門と延宝頃の主屋とが今も立派に保存されている数少ない貴重な邸で、幕末の11代目市之丞康継が嘉永の頃にこの邸を訪ね、いろいろと先祖康継のこと等を語り合ったという嬉しい記録も残っております。

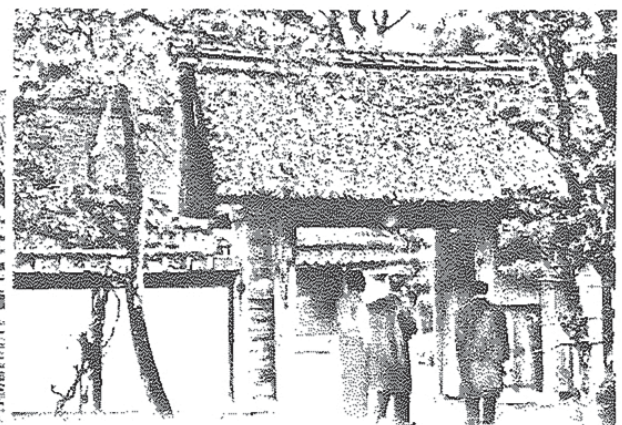
## 虎徹の井戸

彦根の銀座街をぬけて真直ぐ長曾禰湖岸に向かっていると、湖の見えるすぐ手前左側の小さな広場に、四尺四方の石の玉垣に囲まれた井戸が祀られているのが目につきます。

これが近藤勇の「今宵の虎徹はよく斬れる」の台詞と共に名高い虎徹入道興里が淬刃したと伝える井戸なのであります。虎徹という人は、父祖の代までは江州長曾禰の住人でありましたがその後越前へ移住し、当人は越前で生まれ育っていたのであります。彼が故郷を



下坂鍛冶遺跡



江州下坂に残る下坂家の屋敷

はなれて江戸へ向かう途中(寛文頃)、この彦根に1年余り滞在したことを古い記録が語っています。

近江落穂集という幕末の本に、彼が宇津木治部左衛門や青木五郎兵衛(いずれも実在の人物で井伊家の重臣)の宅に滞留してこの長曾禰湖畔で鍛冶をした旨を書き残しておりまして、これがこの井の由来なのです。この井戸は昔から枯れたことのない名水の泉として有名で「サラシヤの井戸」とも呼ばれ非常に大事にされておりました。旧幕時代には井伊藩では周囲に抗を打って注連縄を張り、毎年長曾禰村の年寄たちは井伊家へ出頭して新しい抗を戴くのが恒例になっていたと古老は語っております。今でもこの井の上に「虎徹淬刃水」という碑を建てて地元の人達が保存して下さっているのは大変ありがたいことです。

虎徹は御存じのように、越前時代は甲冑師として著名な人であって刀工として大成したのは江戸へ出てからのことですので、ここでは轡やかみそり又は鑢等の小品を乞われるままに作ったのでしょうか。同書にはわざわざ持主の名をあげておりますだけに、虎徹の駐鎚説は事実であったと信じてよいでしょう。

#### 月山貞一生誕地

長曾禰より5キロほど湖岸に沿って西下しますと須越村(現在の須越町)に到着します。ここは今の人間国宝の月山昇氏(刀銘貞一)の祖父、月山弥五郎貞一の生まれたところがあります。彼は当地の塚本七郎兵衛の子供と



虎徹井戸

して生まれましたが、縁あって泉州堺の刀匠月山弥八郎貞吉の養子として迎えられました。年わずかに7才であったといひます。天成の器用人であったとみえ、14才にして早くも作品を世に出し、古今比類のないほどの技能保持者でありましたが明治の廢刀令の為に初志を伸ばす機会に恵まれず不遇でありましたが、苦難の中にも鍛刀の業を続け、わが国古来の日本刀製作の技法を今の世に伝えた功績ははなはだ偉大なのであります。ほとんど大阪で終始した人でしたが、江州の生んだ名匠の一人として是非ご記憶願いたい一人であります。写真は其の生家の塚本邸跡であります。

#### 甘呂俊長の井戸

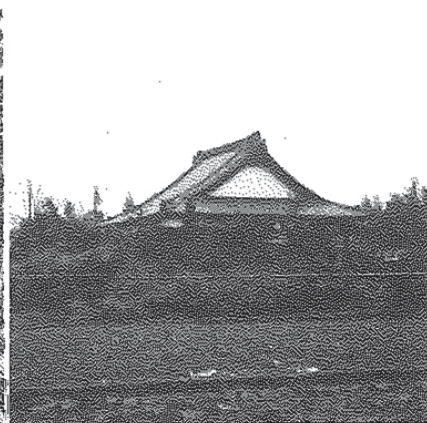
須越村より約2キロ南に甘呂というところがあります。昔はこの地に甘呂寺という大寺があり、多くの僧兵を養っていたようです。その為か、ここには南北朝時代に甘呂俊長という名工がおりました。名人貞宗の弟子といわれておりますが、はっきりしたことは判っ



須越 塚本邸



甘呂井戸



永正寺

ておりません。この集落の西のはずれの道端に、天九郎俊長の井戸跡として立派な碑が建てられております。俊長が天九郎といったかどうかは判りませんが、講談では天九郎勝長という槍の名人の話がありますのでたぶんこれと混同していたのでしょう。

### 野洲郡高木

この集落は昔から高木貞宗や津田助直の故地と伝えられていますが、これが永源寺町の高木の誤りであったことは最近明らかにされつつあります。しかしこの地にも刀鍛冶がいました。それは鞍馬吉次という刀工です。銘によりますと、江州野洲郡玉造庄吉次、明応5年云々とあって、その数年前に後述の江州御陣が行われ、この刀は備前勝光・宗光の影響を多分に受けた資料的にも作柄的にも貴重なものであります。

### 江州御陣跡

長享2年から始まった足利義尚將軍の江州御陣と呼ばれる戦には、備前国長船の勝光・宗光兄弟を頭とする数多の備前鍛冶が動員されて、栗田郡鈎の陣中で鍛刀をしております。この場所は、現在の草津市下鈎蓮台寺のあたりで、永正寺がそれに相当する真宝館跡になります。

### 堀井胤吉の石山墓地

文豪島崎藤村と刀鍛冶堀井来助との石山での出会いが若い藤村に衝撃的な感動を与え、後のちまで彼の人生への生き方の指針となったと伝えられていますが、この来助こと堀井胤吉は幕末の最後を飾った近江刀工であります。

始め月山貞吉のもとに入門し、後に師の推薦によって江戸の名工大慶直胤に入門、苦学の上、郷里石山へ帰郷、膳所藩工を経て、明治の廃刀令後ただひたすらに名刀を残さんと研究を続けた彼の執念は、若い藤村が書き残した通り誠に人を感動させずにはおかないのであります。前述の月山貞一同様、今日に日本刀技法を伝えた数少ない恩人でもありま

す。

今、石山寺墓地に静かに眠る親子三代の墓、墓碑に「宮内省刀匠堀井胤吉翁之墓」とあり、歿年は明治36年4月、年83才でありました。

### 近江石堂の跡

室町時代に江州蒲生住助某と銘記する刀工集団がありました。世にこれを石堂鍛冶と呼んでおります。新刀石堂（江戸時代以後の刀を新刀と呼ぶ）の一派は皆ここから発生したと伝えております。実のところこの派の発生源や住居地については何一つ正確な記録がないのが現状ですが、伝承されたところでは阿育王で有名な石塔寺の南方300<sup>㍎</sup>の地点だとされております。現在の刀剣書では、前述の江州御陣の勝光・宗光等の江州への落し子のように書かれていますが、私はこれとは全く関係のない江州生粋の刀工であったと考えております。

### 江州高木の里

有名な南北朝時代の巨匠彦四郎貞宗や江戸時代の名工近江守助直等の居住地は、野洲郡の高木とあらゆる剣書に記されてありますが、これは誤りで、本当は神崎郡永源寺町（往時は蒲生郡高木）の高木であったことは、最近の調査で明らかになりました。この地は今も淋しい村落ですが、この有名な貞宗が刀銘に江州高木住貞宗と堂どうと銘記している事は、当時かなり著名な土地であったと見なくてはなりません。



堀井胤吉翁の墓

正慶元年製の石燈籠

貞宗という人は、彦四郎とか孫小四郎とも呼ばれた人でこの素姓は、佐々木四郎長綱の孫の子、すなわち彦である意味を表し、佐々木一族の中でも血のつながりの濃い人なのでありました。古書に貴子也とあるのはその事を意味しております。当時の江州守護、佐々木六角判官太夫時信の命により、鎌倉幕府の刀工、名人正宗(岡崎五郎入道)の弟子となり、修業の後、その唯一の後継者となって貞宗と名乗るようになったのであります。鎌倉幕府の滅亡後は、六角時信の子、同じく判官大夫氏頼の命のままに、あるいは相州鎌倉に、あるいは江州にと鍛刀を続けました。したがって貞宗の刀工遺跡としては、江州では彼の居住地高木はもちろんのことですが南北朝争乱期に突入してからは、氏頼の指示に従って安土町慈恩寺(現在は浄厳院となる)や、近江八幡の金田庄西庄(饒石神社の辺)でも作刀しております。いずれも佐々木氏の居館のあったところで、後に氏頼は亡母の為及び亡父の為にそれぞれ、慈恩寺と金剛寺とを建立することになった場所であります。

また彼の晩年はエノ木の彦四郎と呼ばれたのでありますが、これは長浜市の榎木町加納(当時は坂田郡榎木庄)で鍛刀していたからであります。理由は氏頼の舎弟信詮の注文でその領内で部下の兵共を使用させる陣刀を作らせる為でありました。彼の江州時代の作刀はほとんどが軍陣用に使用され、住吉天王寺の合戦や四条畷の戦にそれぞれ佐々木軍の兵

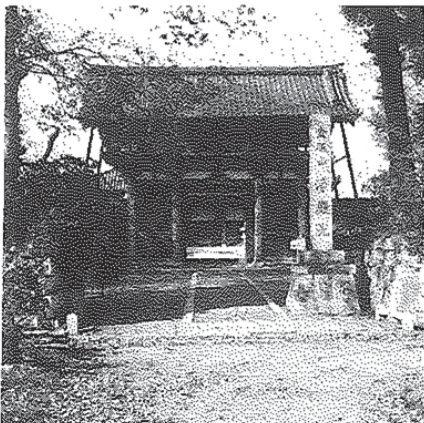
士たちにたくさん使用されたことでしょう。

降って江戸時代になりますと、高木村からはもう一人有名な刀匠近江守助直が出現しております。彼は大阪で当時日本一の鍛冶といわれた津田越前守助広の妹婿となり、また弟弟子として義兄助広の作刀を助け、師の助広歿後はその後継者として、津田家三代目を襲いでおります。従って以後は、江州高木を完全に離れて大阪へ移り、津田近江守助直として数かずの優品を世に残しております。ちなみに、助直の直という字は、井伊藩主の直の賜名であったと推定されています。

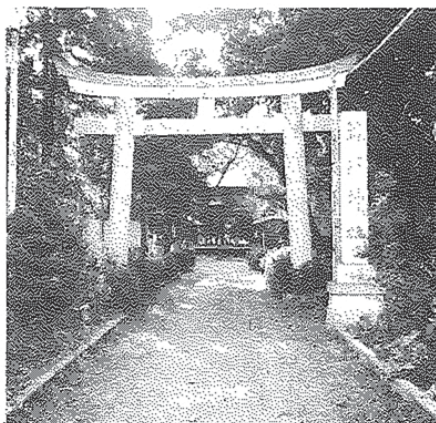
助直も郷土の先輩貞宗にあやかろうという意志があったのかどうか判りませんが、通称を孫太夫と称し、孫小四郎と同じ孫の字を使い、また、いずれも当代第一の巨匠、正宗と助広という名人に師事することになり、また、両人ともにその後継者になっている事は興味深いことであります。

今、高木の地を訪れますと、村はずれの森の中に白鳥神社という古いお社があることに気が付きます。先年まではこの社殿の前に、正慶2年の銘のある石燈籠がおかれていて、私もこの燈籠の灯を貞宗もまた助直も朝夕眺めた時もあったのかと大変懐しく拝見したことを思い出しますが、今は保存の為に近くの公民館に移された由、この地で見られなかったことを大変残念に思ったことでした。

(岡田孝夫氏提供)



慈 恩 寺



金田庄西庄 饒石神社



高木の白鳥神社